

オーストラリア学会編集

## オーストラリア研究

第15号



2003. 3

## 〈特別講演〉

Australia and Japan under the World Trading Organization: How can we Harmonize our Industries?  
 .....Paul Riethmuller (1)

## 〈論文〉

Australia's Distinctiveness in a Globalizing World: Towards a New Area Studies  
 .....Michael Jacques · Allan Patience (15)

An Ethnographical Study of Vietnamese Migrants in Multicultural Australia: The Reality  
 .....Keiji Maegawa (36)

オーストラリアの言語政策—二つの国家政策の理念と目標—.....青木 麻衣子 (48)

## 〈特集〉

ジャパニーズ・イン・オーストラリア—「記憶」〈過去と現在の交錯点〉—特集によせて  
 .....塩原 良和・保莉 実・村上 雄一 (62)

オーストラリア先住民とジャパニーズ—開かれた「和解」のために—.....保莉 実 (65)

クィーンズランドの日本人砂糖黍年季契約労働者のイメージ  
 —1889年から1893年を中心として—.....村上 雄一 (81)

「和解」のないままに—日系オーストラリア人強制収容が意味したこと—.....永田 由利子 (91)

Point of No Returnを越える時—日本人戦争花嫁のオーストラリア定着過程—.....田村 恵子 (104)

エッセンシャルな「記憶」/ハイブリッドな「記憶」  
 —キャンベラの日本人エスニック・スクールを事例に—.....塩原 良和 (118)

オーストラリア学会会員 研究文献目録 (追加) ..... (132)

発売元

筑波書房

# JOURNAL OF AUSTRALIAN STUDIES

VOL. 15

March, 2003

## CONTENTS

### [Special Lecture]

- Australia and Japan under the World Trading Organization: How can we Harmonize our Industries?  
.....Paul Riethmuller (1)

### [Articles]

- Australia's Distinctiveness in a Globalizing World: Towards a New Area Studies  
.....Michael Jacques · Allan Patience (15)
- An Ethnographical Study of Vietnamese Migrants in Multicultural Australia: The Reality  
.....Keiji Maegawa (36)
- The Language Policies in Australia: Ideas and Objectives in two national language policies  
.....Maiko Aoki (48)

### [Feature Articles]

- Japanese in Australia: Introduction  
.....Yoshikazu Shiobara · Minoru Hokari · Yuichi Murakami (62)
- Indigenous Australians and Japanese Migrants: For 'Open' Reconciliation  
.....Minoru Hokari (65)
- Images of Japanese labourers in Queensland: 1889-1893.  
.....Yuichi Murakami (81)
- Unsettled Matter : Legacy of Japanese Internment in Australia  
.....Yuriko Nagata (91)
- Beyond the Point of No Return: Settlement Process of Japanese War Brides in Australia  
.....Keiko Tamura (104)
- The 'Essential' Memory / The 'Hybrid' Memory:  
A Case Study of a Japanese Ethnic School in Canberra.....Yoshikazu Shiobara (118)
- List of members' bibliography  
..... (132)

Australian Studies Association of Japan

## ジャパニーズ・イン・オーストラリア

### —「記憶」〈過去と現在の交錯点〉— 特集によせて

塩原 良和\*・保莉 実\*\*・村上 雄一\*\*\*

本特集は、2002年6月9日に開催されたオーストラリア学会第13回全国研究大会における同名のテーマセッションの成果を発展させたものである。テーマセッションで報告をおこなった永田、田村、保莉、塩原のほか、研究大会では司会を担当した村上の寄稿も含めた5本の論文から本特集は構成されている。ここでは、なぜ今「ジャパニーズ・イン・オーストラリア」に注目するのかという本企画の問題意識を述べつつ、各論文の位置づけを解説して本特集の序文としたい。

本特集における第一の問題関心は、オーストラリアにおける日系・日本人移民を、「エスニック・コミュニティ」の一員として、オーストラリア社会との関連のなかでとらえなおすことにある。周知のとおり、多文化主義の展開と先住民族の権利回復運動の本格化とともに、オーストラリアに関する人文・社会科学において、従来暗黙の前提となっていた「アングロ・ケルト（白人）」中心主義からの脱却を試み、国民国家オーストラリアのエスニック・文化的多様性に注目した研究が盛んに行われるようになってきている<sup>1)</sup>。このような潮流のなかで、オーストラリアのエスニック・コミュニティの一員として日系・日本人移民コミュニティをとらえたとき、どのような 이슈が浮上してくるのだろうか。本特集の執筆者たちは、この問題意識を出発点として共有している。たとえば保莉論文は、先住民族との「和解」をテーマに、コロニアリズムの加害者としてのジャパニーズの「連累」を問おうとする。記憶を手がかりとして、オーストラリア史に足跡を残している「日本人・日系人」を現代オーストラリア社会の問題系に接続することを目指す本特集にとって、現代オース

トラリア社会における「ジャパニーズ」の当時者性を問う保莉論文はひとつのパースペクティブを提示している。

「ジャパニーズ・イン・オーストラリア」を扱ってきた従来の研究にはこうした同時代性への認識は希薄であり、むしろ多くの場合、オーストラリアの日系移民をもっぱら第二次大戦前の「過去の出来事」としてのみ扱う傾向にあった。確かに永田論文が指摘するように、第二次世界大戦中の強制収容と戦後の強制送還はオーストラリアにおける日系・日本人コミュニティに人的・歴史的断絶をもたらした。しかし従来の研究においてこのような断絶が過度に強調されてきた面も否定できない。ここに、「ジャパニーズ・イン・オーストラリア」をめぐる集合的記憶に注目する意義が見出される。なぜなら、「記憶」とは現在に生きる我々が過去の出来事の断片を再構成することで現在の文脈へと接続しようとする営みだからである。

村上論文および永田論文は、原則として「過去」を扱う外交史あるいは移民史という手法に拠りつつ、現在に受け継がれた記憶としての歴史に注目することで在豪日系・日本人コミュニティの戦前と戦後の架橋を試みている。村上論文では、19世紀後半のクイーンズランド植民地で砂糖黍農業に従事していた日本人年季労働者が、1990年代オーストラリアの対日外交をめぐる言説のなかで集合的記憶として出現してくる様が分析されている。一方永田論文では、第二次世界大戦中の日系・日本人住民の強制収容を経てなおオーストラリアに残ったわずか百数十名の日系・日本人ディアスポラたちの存在を綿密な聞き取り調査をもとに照らし出し、(保莉論文とは対照的に)被害者としてのジャパニーズの現在における「和解」の必要と可能性が模索されている。彼らは「ジャパニーズ・イン・オーストラリア」の戦前と戦後を人的に架橋する人々であり、それゆえ彼ら個々の

\* 慶応義塾大学大学院社会学研究科

\*\* 日本学術振興会特別研究員

\*\*\* 福島大学行政社会学部

強制収容の記憶は、戦後補償の問題などと絡み合い、これまで忘却されてきた過去と現在の連続性（あるいは接続可能性）を生々しく示してくれる。永田論文は、オーストラリアと日本という「国民の記憶」のはざままで忘却されていた、ディアスポラの記憶を再生させる試みである。

若干なりとも研究がなされてきた第二次世界大戦前の日系・日本人コミュニティとは対照的に、田村論文および塩原論文が扱っている戦後から現代に至る日系・日本人移民コミュニティを分析した先行研究は少ない。田村論文では、人類学的視点から、戦後初期に日本から移り住んだいわゆる「戦争花嫁」の人々の記憶をたどることで、彼女たちの「日本人」から「オーストラリア人」へのアイデンティティ変容のあり方を分析している。そして塩原論文は、1980年代から次第に増加してきた日本からの移住者たちのコミュニティ組織における「日本語」「日本文化」維持の努力と、「日本」にまつわる彼らの記憶から生じるハイブリッド性の契機をキャンベラにおける具体的な教育現場を題材として分析している。

ところで、「ジャパニーズ・イン・オーストラリア」とは何者なのか。戦後オーストラリアへやってきた日本人永住者および日系のオーストラリア市民権取得者が移民研究の題材としてほとんど取り上げられてこなかった背景には、「オーストラリアの日本人」の大半は企業の駐在員などの一時的居住者であり、したがって彼らは「日系移民」ではなくそのままの「日本人」である、という暗黙の前提が存在していたことが考えられる。しかし実際には、多文化主義政策開始後約30年を経て在豪日系・日本人移民の数は着実に増加している。現在オーストラリアに住んでいる在留邦人の多くが永住者であり、またオーストラリアで生まれ育った第2世代も着実に増加している<sup>2)</sup>。移民の定住プロセスのなかでのアイデンティティの変容やハイブリッド性といった問題が移民研究の主要なイシューとして広く認識されるようになって久しい<sup>3)</sup>。田村論文と塩原論文では、今日の日系・日本人永住者コミュニティをこうした問題系のなかに位置づけることで、現代オーストラリア社会における「エスニック・コミュニティ」としての「ジャパニーズ」という視点の重要性を明らかに

する。そしてふたつの論文が明らかにしているように、ジャパニーズ・コミュニティの過去・現在・未来を人々の意識のなかで結びつけているものこそ「記憶」なのである。

さらに、「ジャパニーズ・イン・オーストラリア」は国境を越える。これまでの日本におけるオーストラリア研究では、オーストラリアを「他者化」し、そこで起こる出来事を日本人のまなざしで捉え、比較し、分析する傾向が一般的であったように思われる。しかし、グローバル化が急激に進行するなかで国境を越えた人々の往来は激しさを増し、「移民」と「非移民」の区別が急速に曖昧になりつつある。そのような時代における「ジャパニーズ・イン・オーストラリア」とは、オーストラリアにかつて住み、あるいは今も日豪間を物理的・心理的に往復し続ける存在としてのわれわれ「日本人オーストラリア研究者」のこともあるといえないだろうか。「ジャパニーズ・イン・オーストラリア」への注目は、従来の地域研究的枠組みにおける「われわれ（日本）」と「かれら（オーストラリア）」という認識論的境界線を相対化する試みという側面をもつのである<sup>4)</sup>。それが成功しているかどうかは読者諸氏の判断に委ねられるが、この特集が日本におけるオーストラリア研究を展開させていくささやかな試みとして記憶されるならば幸いである。

[注]

- (1) たとえば、Jacqueline Lo, Tseen Khoo, and Helen Gilbert eds. *Diaspora: Negotiating Asian-Australia*. St. Lucia, QLD: University of Queensland Press, 2000; Wayne Hudson and Geoffrey Bolton eds. *Creating Australia: Changing Australian History*. St. Leonards NSW: Allen and Unwin, 1997.
- (2) 水上徹男、1996、「日本人のオーストラリアへの係わり」プルネンドラ・ジェイン、水上徹男『グラスルーツの国際交流』ハーベスト社、pp.123-60; Department of Immigration and Multicultural Affairs (DIMA), *The Japan-Born Community*, 2000.
- (3) たとえば、John Docker and Gerhard Fischer eds. *Race, Colour and Identity in Australia and New Zealand*. Sydney: UNSW Press, 2000; Ien Ang et al. eds. *Alter/Asians: Asian-Australian Identities in Art, Media, and Popular Culture*. Annandale NSW:

Pluto Press, 2000.

- (4) この問題について、テッサ・モーリス・スズキは、オーストラリア在住の日本研究者というポジションから(すなわち、われわれとは対極の位置から、しかし、同時にわれわれと共通の問題意識をもって)検討をくわえている。テッサ・モーリス・スズキ『批

判的想像力のために—グローバル化時代の日本—』平凡社、2002年。また、同氏による「地域研究」の限界を問うた論考から多くの示唆をうけた。Tessa Morris-Suzuki, "Anti-Area Studies" *Communal/Plural*, vol.8, 2000, pp.9-23.